

## 風姿花伝第三、問答条々

### 八 委れたる風情

問。常の批判にも、萎れた  
ると申事あり。如何様なる  
所ぞや。

〔口訳〕問。普通の場合の芸評に於ても、「しほれてゐる」といふ批評の言を聞くことがあります。一体「しほれる」といふのは、どんな所をさすものでありますか。

答。これ殊に記すに及ばず。

その風情現れまじ。さりな  
がら、正しく、萎れたる

答。このしほれるといふ事は、言葉で示すといふ事は殊に不可能事である。又よし説明しても、しほれたる風情といふものは、あらはれるものではないと思ふ。しかし、正しくしほれた

風体は有る物なり。これも  
唯、花によりての風情なり。

能々案じて見るに、稽古

にも、振る舞いにも及がた  
し。花を究めたらば知るべ  
きか。されば、普く物真似  
毎に無しとも、一方の花を

風体といふものはあるものなのだ。が、  
これもただ、芸能の花といふものに因  
つて生ずる風情なのである。よくよく  
考へて見るに、このしほれは、稽古で  
得られるものでもなく、又振舞ひの仕  
方によつて生ずるものでもない。結局、  
芸能の花といふものを究め尽したなら  
ば、これを自覚し自知する事が出来よ  
うかと思ふ。それで、すべての物真似  
に於て、何れも花を究めたといふ迄に  
到らなくとも、どれか一方面に於て花  
を究め尽した人なら、しほれたる所  
を自得する事もあらう。だから、この

究めたらん人は、萎れたる  
所をも知る事あるべし。然

ば、この萎れたると申事、

花よりも尚上の事にも申つ

べし。但し、花無くては萎

れ所無役なり。されば湿り

たるに成るべし。花の萎れ

しほれてゐるといふ事は、花といふも  
のよりも更に一層上位のことだと言つ  
ても良いかと思ふ。しかし注意すべき  
は、花がなくてはしほれて見たとて何  
の役にも立たない。花のないしほれは  
眞のしほれでなくて、しめりたるもの  
といふべきである。美しい花がしほれ  
た風情こそ面白いが、花も咲いてゐな  
い木がしほれたとて、何の風情があら  
う。かやうな次第で、花を究めるとい  
ふ事が既に此道の者にとつて一大事で  
あるのに、その更に上位のものともい  
ふべき事であるから、しほれたる風情

たらんこそ面白けれ。花咲

かぬ草木の萎<sup>しほ</sup>れたらんは、

何か面白かるべき。されば、

花<sup>はな</sup>を究<sup>きわ</sup>めん事、一大事なる

に、その上<sup>うへ</sup>とも申べき事な

れば、萎<sup>しほ</sup>れたる風体、返<sup>かへすく</sup>

大事也。さる程に辞<sup>ことば</sup>にも申

がたし。古哥<sup>こか</sup>云<sup>いふ</sup>、

薄霧<sup>うすぎり</sup>の籬<sup>まがき</sup>の花の朝しめり

秋<sup>ゆふ</sup>は夕べと誰か言ひけむ

かやうなる風体にてや有<sup>あ</sup>る

べき。心中に当<sup>あ</sup>てゝ公案<sup>こうあん</sup>す

べし。

といふことは、かへすがへすも大事である。それで、かやうな事は言葉では言ひ得るものではない。古歌に

\*うす霧のまがきの花の朝しめり秋は夕

と誰かいひけむ

といふ歌がある。しほれといふのは、この歌によまれたやうな風体をいふものであらうか。千思万慮の工夫をつくして見ることが大切である。

この花伝書第三問答条々は、花を説く事が眼目である。その花の最後に、しほれたる風情を加へて、「花よりもなほ上のこともにも申しつべし」といつて居る所を見ると、この条を書いた世阿弥には、ただ幽玄な花だけでは満足しきれないで、その花にやや萎れを持つた風情の特殊な魅力をも、心がけて居た事がうかがはれる。花から萎れへの線を、遙かに延長する時、我々は花鏡にのべられて居る「さび」や「ひえたる」ものの存在を、そこに感じるのである。妖艶から幽艶へ、それから淡々たる美しさへ、更に進んで寂びにまで進むのは、東洋芸術の一特色である。

世阿弥は萎れの基体を花に置いてゐる。「花がなくては萎れでない、それはしめりたるものに過ぎない」といふ一語は、實に周到な注意で、千鈞の重味がある。若し稽古や振舞で萎れを求める者があるならば、それこそしめりを得るだけにならう。ここが芸能のむづかしい所であり、又味のある所である。位が進めばおのづから自得せられるが、その位に到らないものには、求めては怪我を招くのみである。

萎れは口では説明し難い。ただ直感するだけである。海棠の雨を帶びた風情とか、李花一枝雨を帶ぶとか、良き女のなやめる所あるに

似たりとか、さまざまこれを譬へるべきものがある。が、美人がなやめる所あつてこそ美しいが、美人ならぬ者が西施の鬢にならつても、それは結局うたて興ざめたるものに終る。で結局、花が何としても大切だといふ所に落ちつくわけである。

\*うすぎりの——この歌は藤原清輔の作で、新古今集に採られた名歌である。籬の花が薄霧に包まれて色もややほのかに、しつとりとした朝しめりの風情で咲いてゐる。それを見ると、「秋のあはれは夕こそ勝れ」といつたのは誰なのか、この朝の秋の光景こそ、夕べにもまさつてゐるではないかと、思はずもいひ度い衝動にかられるといふ意である。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次著